

第二言語における主語と動詞の「一致」の知識 －日本人英語学習者のデータから－¹

Knowledge of subject-verb agreement in the second language: Some data of Japanese learners of English

(平成16年9月受理)

坂内 昌徳* (BANNAI Masanori)

佐々木 裕美** (SASAKI Yumi)

Abstract

In the field of second language acquisition, acquisition of morphological inflection has been identified as one of the most erroneous areas. In this paper, we present some data from a small scale experiment where Japanese learners of English were tested on the appropriate use of [3rd person][singular] “-s” in sentences with constituents intervening in different syntactic positions between the subject and the verb. The observed errors are discussed with reference to the predictions of recent hypotheses on second language acquisition. The results suggest that some recent hypotheses on second language acquisition are unsatisfactory, and that further investigations into second language morphology utilising various syntactic environments is needed.

1 はじめに

第二言語習得研究においては、その初期から、第二言語学習者特有の「誤り」が見られることが明らかにされ、その研究の重要性が指摘されてきた(例: Corder, 1967)。日本人英語学習者の「誤り」についても様々な角度から研究がなされてきている(例: Wakabayashi, 2002)。これまでの主な研究では、ある形態素の誤りは別の形態素に比較してより多く観察されることや、習得が幾つかの特定の段階を経て進むことなどから、第二言語習得・第二言語使用において言語習得装置(Language Acquisition Device)、あるいは普遍文法(Universal Grammar: UG)が関与していることが議論されてきている。²

本研究では、日本人英語学習者に見られるいわゆる「3人称単数(3SG)の“-s”」の誤り(または脱落)に注目し、誤りの要因を考察することで「一致」の「知識(knowledge: Chomsky, 1986)」の実態について考察する。実験では、一致形態素“-s”の表出または

脱落が、主語名詞句と述語動詞の間に副詞が入る場合と関係節が入る場合とではどのような変化するかを比較する。本実験データから、主語名詞句と述語動詞の間に入れられる要素の統語的役割の違いが日本人英語学習者の一致形態素の脱落に関与している事が示される。さらに、このデータは最近提案されている第二言語習得モデル(例: Prévost & White, 2000; Lardière, 2000)では説明出来ないことを示し、今後さらに多様な統語的環境での実験が必要であることを指摘する。

本稿では以下のように議論を進める。まず第2章では英語の主語名詞句と述語動詞間の「一致」について、極小理論(Minimalist Program: Chomsky, 1995)に基づいた分析を示す。第3章では生成文法の枠組みでの最近の代表的な第二言語習得モデル「形態論的アプローチ」を概観し、第4章で日本人英語学習者の「3単現の“-s”」の使用および脱落の要因についてこれまでに提案された第二言語習得モデルとの関わりから考察し、それぞれの仮説から予測をたて

* 福島工業高等専門学校 一般教科(英語)(いわき市平上荒川字長尾30)

** 平成13年度福島工業高等専門学校 コミュニケーション情報学科 卒業生

る。第5・6章で本研究の実験とその結果について記述し、第7・8章で、実験結果からそれぞれの仮説を検証し、本研究が第二言語習得研究に対して示唆すること、および今後の問題点について論じる。

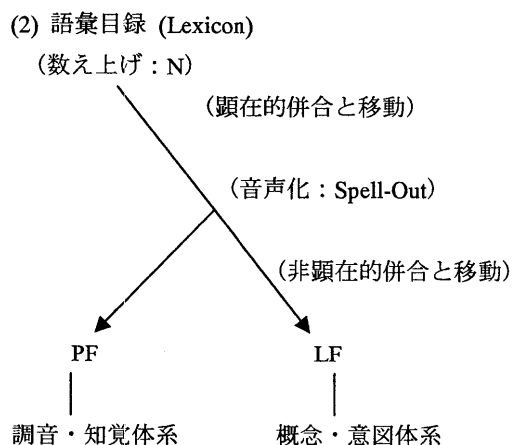
2 英語における主語と動詞の「一致」

英語では主語名詞句と述語動詞の間での「一致」は、「三人称」「単数」(「現在」時制)の"-s"という形で表れる。

(1) a. John often plays tennis on Sundays.

b. *John often play tennis on Sundays.

このように英語などに見られる主語名詞句と述語動詞間の「一致」現象の言語学的分析についてはこれまでいくつかの提案がなされてきているが、ここでは極小理論 (Minimalist Program: Chomsky, 1995) の枠組み(2)で捉えておくことにする。

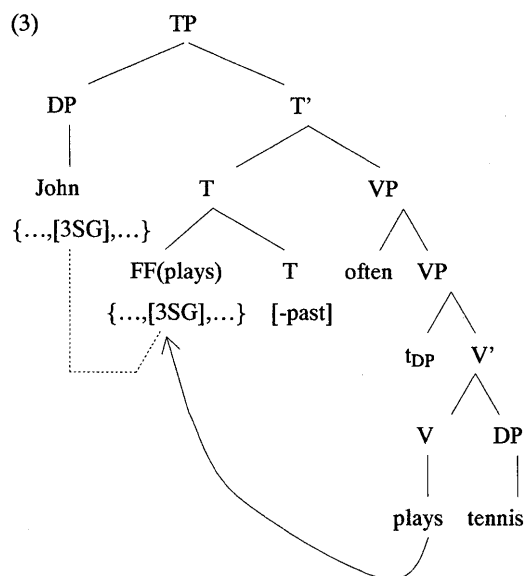


極小理論において文法は語彙目録 (Lexicon) と計算体系 (computational system) で構成されている。文の派生は概略次のように行われると考えられている。まず語彙目録において、個々の語彙項目が語形とその素性を決定されて (feature association) 計算体系に導入され (数え上げ: Numeration) る。計算体系では項目の併合 (Merge) と移動 (Move) が適用され統語構造を構築していき、ある段階で音声に関わる情報が調音・知覚体系とのインターフェイスの役割をはたす PF へと送られる。音韻以外の情報はさら概念・意図体系とのインターフェイスの役割を果たす LF へと進む。

選択された語彙項目はそれが持つ素性がその文にとって適格であるか、派生の過程、則ち計算体系で

「照合」されることで確かめられる。例えば(1a)の主語名詞句と述語動詞間の「一致」という形で表出する主語と述語動詞の素性の照合は概略(3)のように示すことができる。Chomsky (1995) によれば、数え上げ、すなわち文を構成するために必要かつ適切な語彙 (素性を含む) の選択は一度に行われ、その後の派生で語彙目録は再びアクセスされることはない。また、もし派生のどこかで新たな項目が加えられると「包含性の条件 (the condition of inclusiveness)」³の違反となる。

(3)の図で、主語 John の人称素性と数素性[3rd person, singular (3SG)]と動詞 plays の形式素性 (Formal Feature (FF)) [3SG]は一致するので、適格であると判断される。



このように主語名詞句と述語動詞間の「一致」は機能範疇 Tense (T)の指定部—主要部間における素性の照合という形で行われる。⁴ 英語の T は強い D 素性を持ち、VP 内にある主語 DP の John (上の図(3)では t_{DP} と表してある) が顕在的に音声化以前に TP の指定部に繰り上げられる。一方、T の V 素性は弱いため、plays の FF[3SG]は音形を伴わない素性のみが音声化以降に非顕在的に移動されて、TP 指定部に移動されている John の素性[3SG]と[指定部—主要部]構造で照合される。このように「一致」の現象を機能範疇 T の持つ V 素性の「強さ」を用いて説明することで、英語や他の言語に見られる語順の違いが説明される。例えば(4a)の英語の文は副詞 “often” が述語動詞とその目的語名詞句の間に置かれているが、文法的な文としては容認されない。しかし、これと同様のフランス語の文(4b)は文法的に

正しい文である。

- (4) a. *Elmer washes often his cat
b. Elmer lave souvent son chat (Marantz, 1995)

(3)の図、さらに「要素の移動の全ては素性の照合が原因となっている」とする極小理論の考え方に従えば、(4a)の文では動詞 “washes” が副詞 “often” を飛び越えて、素性の照合の為にTに移動している。英語のTのV素性は「弱い」ことから、この顕在的な動詞の繰り上げは許されない。一方で、フランス語ではTが「強い」V素性を持つとされている。そのため、(4b)では動詞がFFと共に顕在的に（しかも義務的に）繰り上げられる。⁵

以上、英語における主語名詞句と述語動詞間の「一致」のメカニズムを極小理論に基づいて概観した。それでは、第二言語学習者の中間言語 (Interlanguage) に一致形態素の脱落 (誤り) が多く見られるのは上述の一致のプロセスの中のどの部分に問題があるからなのだろうか。

3 「形態論的アプローチ」

一般的に言語習得研究においては、音声として表面に現れる形態と各語彙項目 (John, play, -s, etc.) が持つ統語的素性とは互いにリンクしていると考えられてきた (例: Rohrbacher, 1994; Vainikka & Young-Scholten, 1994, 1996)。例えば、学習者が動詞の一致形態素の体系を習得するまでは Agr (T) の V 素性の値 [+/- strong] は未特定 (unspecified) または不活性な状態である。よって、形態素と素性の値 [+/- strong] が設定されていないことが (義務的ではなく) 随意的な動詞の繰り上げに繋がるという考え方で、無価素性仮説 (Valueless Features Hypothesis) と呼ばれる (例: Eubank, 1993/1994, 1996; Eubank & Grace, 1996; Eubank et al., 1997)。⁶

こうした考え方に対し、表面的に音声として表出する形態と統語的素性とは別々のモジュールによって操作されているとしてこの二つを区別して考えるべきであると主張する研究者もいる (例: Haznedar & Schwartz, 1997; Ionin & Wexler, 2002; Lardière, 1998, 2000; Prévost & White, 2000)。Lardière は、ほぼ習得終了 (または安定) 状態に達したと仮定できるアメリカで生活する中国人英語学習者 Patty の産出データを8年6ヶ月にわたり収集した。Patty の一致形態素 (則ち「3人称単数の“-s”」) の正しい使用は、そ

の使用が義務的である文脈中の約4%しか観察されなかった。しかし、その一方で(4b)でみたフランス語の例のように動詞が否定要素 (Neg) や副詞を越えて繰り上げられる例も無かった事に注目し、形態素が習得されるとされないに関わらず Agr (T) の [+/- strong] 素性は習得可能であると主張した。

さらに Lardière (2000) は、第一言語では素性と形態のマッピングがUGの一部として習得に制限として機能しているが、臨界期 (critical period) 後の第二言語においてはこのマッピング能力が子供にくらべて劣ってくるのが、「一致」が正しく使用できない要因であるかもしれないと主張し、L2学習者にとっての問題はどこでどのように統語的には習得している (Schwartz & Sprouse 1994, 1996 に従えば「UGによって与えられている」機能素性に形態をにマッピングするかということである、としている。⁷この立場は表層屈折欠損仮説 (Missing Surface Inflection Hypothesis) と呼ばれる。

しかし、こうした「形態論的アプローチ」には問題点があることが指摘されている (例: Franceschina, 2001; 若林, 2002)。中でも最も重要な問題は「形態論的アプローチ」の唱える素性と形態との「マッピング」とは第2章で概観した極小理論の枠組みでの派生の流れ、則ち: 語彙目録→数え上げ (Numeration) → [計算体系-音声化→PF/LF 部門での処理] の中のどの部分を指して議論しているか、という点である。「形態論的アプローチ」は、素性照合が正しく行われてもさら「マッピング」問題が生じているため、屈折形態素が正しく音声化されないということを主張する。LF と PF という2つのインターフェイス以外には表示のレベルとして認めない極小理論の考え方では、「マッピング」はどこで行われると考えればよいのだろうか。⁸少なくとも第二言語話者の文法には機能範疇や素性が備わっていて、しかも計算体系で行われる照合操作は自動的に行われるとする立場 (例: Lardière, 2000) からは、「マッピング」とはPF部門内で行われる操作と仮定するしかない。

4 第二言語における「-s」脱落の要因

英語の「3人称単数の“-s”」は、多くの学習者が外国語として英語の学習を開始する比較的早い段階から教材に導入される文法項目である。多くの学習者が「3人称単数の“-s”」を明示的知識 (Doughty & Williams, 1998) としては習得し、知るようになると考えられる。この事は日本人英語学習者にも当ては

まる。彼等に「3人称単数の"-s"」が使用されるべき文脈に使用されていなかったり、誤って使用されたりしている文を文字として与えられと殆どの場合に正しく「誤り」を検出できる (例: Wakabayashi, 1997)。しかしその一方で、同様の文を比較的早い速度で読ませるようなタスクにおいては「3人称単数の"-s"」の誤りを検出する割合は極端に低い (Wakabayashi et al., 2004)。また Lardièrè (1998) のデータからも分かるように、自由な口頭での産出においても「3人称単数の"-s"」は正しく使用される割合は極端に低い。

4.1 作動記憶の問題

では第二言語話者におけるこの問題はどこからくるのであろうか。先に述べた言語学的議論とは別に、言語処理の観点から作動記憶 (working memory) の問題があげられる場合がある。話者が文の主語名詞句を処理する時点で得られる[3SG]素性をその後の述語動詞の[3SG]素性と結び付けて音形に表出するまでの作業は作動記憶という、後の処理に使用するために一時的に要素を置いておく部門の働きであるとする考え方である。もし、第二言語話者が第二言語の文を処理する際には母語を処理する場合に比較してより多くの処理作業上の負荷が加わるとすれば、上述の「3人称単数の"-s"」を使用しなければならぬ事を明示的には知っているが実際の使用は出来ないのはなぜかという問題に答えられるようにも思える。さて、作動記憶が問題であるという立場からは以下の予測を立てることができる。

- (5) 「3人称単数の"-s"」の誤りは作動記憶の問題であるから、主語名詞句と述語動詞との間に何らかの要素が介在した場合、その要素が短い (音節数が少ない) 場合より長い (音節数が多い) 場合、または構造が単純な場合よりは複雑な場合に誤りが多く現れる。

4.2 言語モデル内での問題

次に(2)の図で示した「一致」のメカニズムを含めた極小理論の枠組みで問題のありかを考えてみる。まず派生の最初の段階の語彙目録から並べ立てまでの過程に問題があったとした場合、語彙目録内における機能範疇 T の [+/- strong] 素性、あるいは動詞が持つ[3SG]の素性の習得に何らかの問題があるとする立場と一致する (例: Eubank, 1993/4; Vainikka & Young-Scholten, 1994, 1996; Beck, 1997, 1998)。この無

価素性仮説は次の予想をすると考えられる。⁹

- (6) 語彙目録における並べ立ての段階で素性が欠落しているのであるから、「3人称単数の"-s"」は全く使用されないか、表出と脱落の頻度はランダムに近い。従って(5)で予想した主語名詞句と述語動詞との間に置かれる要素の長さや構造による影響はない。

次に統語計算に必要な語彙 (素性) 情報は習得していて語彙目録に備わっているが、PF 部門において素性と形態素とのマッピングが問題となっているという表層屈折欠損仮説である (Lardièrè, 2000)。(3)で見た枠組みでは英語の「3人称単数の"-s"」に関わる素性の照合は書き出しが行われた後の N→LF において行われ、この操作が PF に与える影響は考えられない。その結果、この場合の予測は、PF 部門での処理における作動記憶の問題を想定すればよいことになるため、(5)と同じ予想となる。

5 実験

5.1 参加者

福島工業高等専門学校コミュニケーション情報学科の3年生20人に協力を得て実験に参加してもらった。本実験の参加者は全て実験時までにはほぼ6年間の標準的な日本の英語教育を受けてきていた。さらに、福島工業高等専門学校入学時より読解・文法中心の英語の授業に加え、約週5時間の英語を母語とする教師によるコミュニケーションに焦点を置いた授業も受けてきていた。これらの参加者は比較的英語に多く触れてきており、一般的な英語の習得の程度が本実験の対象として無理がないと考えられた。教室外での英語への接触の程度は参加者によって差異があったが、個別の応答による調査では以前に1ヶ月以上の英語圏での生活経験のある者は無かった。

5.2 口頭英作文タスク

前章で述べた理由から、参加者たちは「3人称単数の"-s"」について明示的な知識は持っている事が予想される。そのため、比較的明示的知識の介在が少ないと考えられる口頭英作文タスクを用いてデータを収集することにした。

口頭英作文のターゲット文には(7a-1)の12文を用意した。内訳は、主語名詞句と述語動詞との間に副詞も関係詞節も含まず「3人称単数の"-s"」が必要

な文 (パターン1 : (7a-c))、副詞を含む文 (パターン2 : (7d-f))、関係詞節を含む文 (パターン3 : (7g-i))、関係節と副詞の両方を含む文 (パターン4 : (7j-l)) がそれぞれ3文ずつであった。¹⁰以下にターゲット文とそれぞれのターゲット文を引き出すために用いた日本語文を示す。本実験では主語名詞句に3人称単数の人称代名詞と人称固有名詞のみを使用した。従って、正しい英文は全て「3人称単数の"-s"」が必要である。^{11 12}

(7) 実験に使用した刺激文

- a. She likes movies.
彼女は映画が好きだ。
- b. He speaks Japanese.
彼は日本語を話す。
- c. She plays tennis.
彼女はテニスをする。
- d. He often uses a computer.
彼はよくコンピュータを使う。
- e. He always studies English.
彼はいつも英語を勉強する。
- f. She usually cooks dinner.
彼女はたいてい夕飯をつくる。
- g. Jane, who is a high school student, likes music.
高校生であるジェーンは、音楽が好きだ。
- h. John, who is my brother, wants to be a doctor.
私の弟であるジョンは、医者になりたい。
- i. Anne, who is 15 years old, speaks five languages.
15歳であるアンは5カ国語を話す。
- j. Keiko, who is an English teacher, often goes to America.
英語の先生であるケイコはよくアメリカに行く。
- k. Joe, who is a soccer player, always goes to a gym.
サッカー選手であるジョーはいつもジムに行く。
- l. Ken, who is 20 years old often drinks beer.
20歳であるケンはよくビールを飲む。

我々の予測(5)では「3人称単数の"-s"」の誤り(脱落)はパターン4に最も多く、次いでパターン3、パターン2、そしてパターン1の順で少なくなることになる。一方、予測(6)ではパターンによる違いはないはずである。

5.3 実験手順

(7)の日本語文を1文ずつ別々のカードに印刷し、同じ構造の文が連続しないようにバラバラに並べて使用した。目標とする構造を引き出すために、ターゲット文に副詞または関係詞が含まれるものは日本語文の下に使用すべき副詞または関係詞((7)の下線を引いた語)を印刷しておき、それを使用して文をつなげるよう促した。

実験は一人ずつ個別に行い、実験文を提示する前に本実験で扱う構造とは直接関係のない関係詞節を含む文を提示し関係詞節の使用に慣れてもらってから実際の口頭英作文タスクをしてもらった。タスクは日本文カードを一枚ずつ提示し、順次口頭で英訳してもらった。

参加者の口頭英作文データは全てオーディオ・テープに録音した後、文字データに書き起こしたものを分析に使用した。参加者が1文を産出する途中で言い換えた場合は、初めに産出した方をデータとして分析対象とした。

6 結果

(7)の各ターゲット文に対して、副詞が文頭や文末に用いられたもの、関係詞節が正しく作られなかった場合、全体が1文としてまとまらなかった場合、または、動詞を発話してからやや時間をおいて「-s」を付けた場合を分析対照から除外した結果、各ターゲット文毎の有効回答数、正答(正しく「3人称単数の"-s"」を使用したもの)数、および正答率(%)は表1のようであった。図1は正答率のみを視覚的にグラフに示したものである。

7 考察

表1、図1から参加者のデータは同じパターンのターゲット文においてもややばらつきが見られることが分かる。特に関係詞節のみを含んでいた(7h)では他の同じパターン3の文(7g)(7i)に比較して「3人称単数の"-s"」の使用率が著しく低かった。これは使用したそれぞれの文中に使用されるべき語彙項目に対する習熟度に個人差があることが原因であると考えられる。重要な点は、ターゲット文のパターンごとに「3人称単数の"-s"」の使用率の傾向が異なる点である。仮に(7h)を例外として除けば、パターン1(7a-c)とパターン3(7g)(7i)の結果は非常に類似していることが分かる。主語名詞句と述語動詞との

Table 1 ターゲット文パターンごとの有効回答数・正答数・正答率

文パターン	パターン1			パターン2			パターン3			パターン4		
	(7a)	(7b)	(7c)	(7d)	(7e)	(7f)	(7g)	(7h)	(7i)	(7j)	(7k)	(7l)
有効回答数	20	19	20	19	20	20	20	18	16	16	17	16
正答数	20	15	15	2	7	6	18	7	13	8	4	4
正答率 (%)	100	79	75	11	35	30	90	39	81	50	24	25

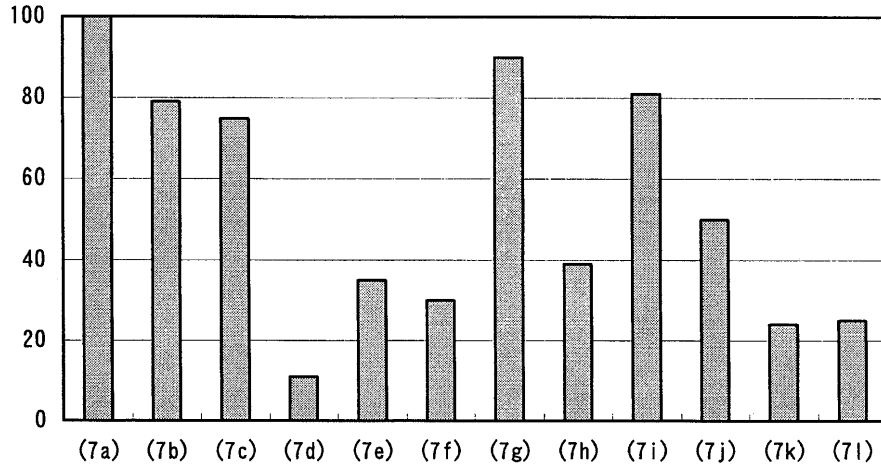


Fig.1 ターゲット文ごとの「3人称単数"-s"」の使用率 (正答率 (%))

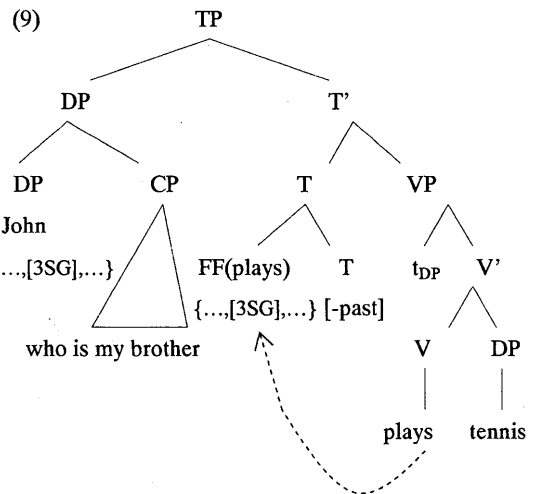
間に関係詞節が入れられても、「3人称単数の"-s"」の使用率は主語名詞句と述語動詞が隣接する場合と変わらないということになる。

副詞が主語名詞句と述語動詞の間に介在するパターン2(7d-f)では、「3人称単数の"-s"」の使用率がパターン1、パターン3と比較して著しく低いことが分かる。さらにパターン2の結果は、副詞と関係詞節が両方含まれていたパターン4(7j-l)の結果と類似している事が分かる。つまり「3人称単数の"-s"」の使用または脱落は主語名詞句と述語動詞の間に入れられる要素の長さや構造の複雑さではなく、副詞か関係詞節かという統語的な役割によって異なっていたと言える。以上の事から、予想(5)、(6)のどちらも支持されなかったということになり、「3人称単数の"-s"」の使用(または脱落)について少なくとも次のような事が言えそうである。

- (8) a. 作動記憶のみが原因ではない。
- b. 機能範疇 T の素性が習得出来ないからではない。
- c. PF 部門での形態と素性ととのマッピングのみが問題ではない。

つまり、これまでに提案されてきたモデルでは本実験の結果は説明ができないことが示された。

それでは、本実験の結果をも説明するような第二言語モデルとはどのようなものであろうか。一つの可能性として、「マッピング」の問題は実は N→LF で起きていることが何らかの形で原因となっていると考えることである(cf. Franceschina, 2001)。このように仮定すると、「3人称単数の"-s"」の表出または脱落には主語名詞句と述語動詞との間に置かれる要素の単なる「長さ」ではなく統語的構造上の位置の違いによる影響が出ることが予測される。例えば、素性の照合に関与する主語名詞句と述語動詞の間に関係詞節が置かれた場合(パターン3・4)の構造は(9)のようなものと考えることができる。



(9)と(3)のそれぞれの樹形図を比較すると、(3)では形式素性(F)が照合されるためにVからTに移動する途上に副詞が介在するが、(9)の関係詞節は主語DPの付加部となっていて、形式素性が移動される途上の構造には影響はない。このように考えると本実験の結果も説明しうる(10)のような予測を立てることができる。

- (10) 「3人称単数の"-s"」の使用は動詞の形式素性が移動する統語構造上の区間内(V-T)に入れられる要素に影響される。

しかし、この仮説には解決しなければならない理論上の問題がある。第2章で述べた極小理論(Chomsky, 1995)の枠組み(2)では、音声化の時点までの文法的操作はPF部門に反映されるが、それ以後の非顕在的操作はPF部門の操作には反映されない。英語の「3人称単数の"-s"」に関わる照合の操作は音声化以後に非顕在的に行われると考えるなら、今回の結果が示すように介在する要素の統語上の位置による違いは現れないはずである。しかし、このようなデータから第二言語においてはUGは機能しないと全く言えないであろう。なぜなら、UGが規定する非顕在的な操作に関与する統語的構造に「3人称単数の"-s"」の使用(または脱落)率が影響されることをデータが示しているからである。UGが機能していなければこのような結果は得られないはずである。

素性照合がどのように形態と素性のマッピングに関与しているのかという事が今後の研究課題であろうが、そのためには、今回のようなデータを含め様々な統語環境を持つ文を用いた実験データを集積してゆく必要がある。

8. 結論

本稿では第二言語話者の持つ主語名詞句と述語動詞間の「一致」の知識について、日本人英語学習者の「3人称単数の"-s"」の使用および脱落のデータに基づいて考察した。実験では、主語名詞句と述語動詞との間に入れられる要素の長さや構造の複雑さではなく、その要素が占める統語構造上の位置が一致形態素の使用または脱落に影響することを示した。第二言語話者に見られる一致形態素の脱落について、これまでに提案されている第二言語モデル、則ち機能範疇や機能素性の習得に何らかの障害を仮定する

仮説(無価素性仮説・機能素性欠損仮説)や、PFにおける形態と素性のマッピングが問題であるとする表層屈折欠損仮説による説明が不十分である事を示した。

註

¹ 本稿で報告するデータ及び議論の一部は佐々木(2002)によるものを基にしている。実験に快く参加してくれた福島工業高等専門学校の学生の諸君に感謝の意を表したい。また本研究にあたっては群馬県立女子大学の若林茂則氏に貴重な助言を頂いた。

² Towell & Hawkins (1994) は第二言語習得研究が説明しなければならない現象として次の5つをあげている。

- i) a. 母語の影響
- b. 発達段階
- c. 系統性
- d. 変異性
- e. 不完全性

³ 「包含性の条件」についてはChomsky (1995: 228)を参照。概略、統語計算の過程には新たな項目は導入されないとするもので、既に導入されている項目の並べ替え(rearrangement)と、インターフェイスにおいての解釈不能な要素の削除(deletion)は含まれない。

⁴ 語彙項目の持つ素性の分類については中村、他(2001:150)を参照。また、より最近では「一致」現象を「指定部—主要部」の構造ではなく、「prove」¹と「goal」²、およびc-統御の概念を用いて説明している(Radford, 2004; Chomsky, 1999)。こうした分析および分散形態(Distributed Morphology)の考え方(Embick & Noyer, 2001)が本実験データの説明に与える示唆については、稿を改めたい。註8を参照。

⁵ 機能範疇T(もしくはINFL)の持つ素性の違いと語順との関係についての詳細は、ここでの議論に直接影響しないので割愛する。この現象に注目した第二言語研究にはWhite (1991)などがある。

⁶ Beck (1997, 1998) は第二言語習得においては機能範疇に含まれる素性が局所的に減損しているとし、機能素性の習得は不可能であるという見方を示している。

⁷ 「形態論的アプローチ」を支持する報告としてはPrévost & White (2000), Ionin & Wexler (2002)がある。

⁸ この問題は理論的な議論が続いている分野であり、未解決の部分が未だ多い(例: Halle & Marantz, 1993; Embick & Noyer, 2001)。特に第二言語話者のデータは母語話者データと比較することで、この分野での理論の発展に大きく貢献することが期待できるが、この点については稿を改めて議論したい。

⁹ 第二言語においては機能素性が習得不可能であるとする類似の提案に機能素性欠損仮説(Failed Functional features Hypothesis: Hawkins & Chan, 1997)もあるが、本稿ではこれら機能範疇、素性の習得になんらかの障害があると仮定する仮説をまとめて議論する。

¹⁰ より一般的に学習者の「一致」の知識を調べるためには「3人称単数の"-s"」が使用されない環境、

則ち主語名詞句が[1人称]、[2人称]、[複数(plural)]を持つ場合や、さらには主語名詞句が人称代名詞以外の場合等多くのパターン刺激文を用いて実験する必要がある。第7章参照。

¹¹ 学習者の産出データには「3人称単数の”-s”」の脱落が頻繁に観察される一方で、誤用(「3人称単数の”-s”」が不要な状況での使用)はまれにしか見られないことが報告されている(例:Lardière, 1998)。

¹² 本実験で用いた関係詞節を含むターゲット文では、文の構造上、関係詞は非制限用法となっている。勿論参加者に提示された日本語には「,」は含まれないが、ここで非制限用法の関係詞節が言語処理上どのように捉えられるかという別の問題がある。しかし、関係詞節はその用法が制限/非制限に関わらず主語名詞句の付加部という構造をもっていること、また、言語処理の上での「長さ」は副詞より長いことに焦点をあてて本論を進めることとする。

参考文献

- Beck, M-L. (1997). Regular verbs, past tense and frequency: Tracking down a potential source of native speaker/nonnative speaker competence differences. *Second Language Research* 13: 93-115.
- Beck, M-L. (1998b). L2 acquisition and obligatory head movement: English speaking learners of German and the Local Impairment Hypothesis. *Studies in Second Language Acquisition* 20: 311-348.
- Corder, S. P. (1967). The significance of learner's errors. *IRAL*, 4: 161-170.
- Chomsky, N. (1986). *Knowledge of language: Its nature, origin and use*. New York: Praeger.
- Chomsky, N. (1995). *The minimalist program*. The MIT Press.
- Chomsky, N. (1999). *Derivation by phase*. MIT Occasional Papers in Linguistics, 18.
- Doughty, C. and J. Williams. (1998). *Focus on Form in Classroom Second Language Acquisition*. Cambridge, UK: CUP.
- Embick, D. and R. Noyer (2001). Movement operations after syntax. *Linguistic Inquiry* 32: 555-95.
- Eubank, L. (1993/94). On the transfer of parametric values in L2 development. *Language Acquisition* 3: 183-208.
- Eubank, L. (1994b). Optionality and the initial state in L2 development. In T. Hoekstra and B. D. Schwartz (eds.), *Language acquisition studies in generative grammar* (pp.369-88). Amsterdam: John Benjamins.
- Eubank, L., J. Bischof, A. Huffstutler, P. Leek, and W. West. (1997). Tom eats slowly cooked eggs: Thematic verb raising in L2 knowledge. *Language Acquisition* 6: 171-200.
- Eubank, L. and S. Grace. (1996). Where's the mature language? Where's the native language? In A. Stingfellow, D. Cahana-Amitay, E. Hughes, and A. Zukowsk. (eds.), *Proceedings of the 20th Boston University Conference on Language Development*. (189-200). Somerville MA: Cascadilla Press.
- Franceschina, F. (2001). Morphological or syntactic deficits in near-native speakers? An assessment of some current proposals. *Second Language Research* 17: 213-247.
- Halle, M. and A. Marantz. (1993). Distributed morphology and the pieces of inflection. In K. Hale and S. J. Keyser. (eds.), *The view from building 20: Essays in linguistics in honor of Sylvain Bromberger* (pp. 111-176). MA: The MIT Press.
- Hawkins, R. and C. Y-H. Chan. (1997). The partial availability of Universal Grammar in second language acquisition: The 'failed functional features hypothesis'. *Second Language Research* 13: 187-226.
- Haznedar, B. and Schwartz, B. D. (1997). Are there optional infinitives in child L2 acquisition? In Hughes, E., Hughes, M. and Greenhill, A., (eds.), *Proceedings of the 21st Annual Boston University Conference on Language Development*. Somerville, MA: Cascadilla Press, 293-306.
- Ionin, T. and Wexler, K. (2002). Why is 'is' easier than '-s'? acquisition of tense/agreement morphology by child second language learners of English. *Second Language Research* 18: 95-136.
- Lardière, D. (1998). Dissociating syntax from morphology in a divergent and-state grammar. *Second Language Research* 14: 359-75.
- Lardière, D. (2000). Mapping features to forms in second language acquisition. In J. Archibald (ed.), *Second language acquisition and linguistic theory*

- (pp. 102-29). Oxford: Blackwell.
- Marantz, A. (1995). The minimalist program. In Weibelhuth, G. (ed.), *Government and binding theory and the minimalist program*. (pp. 349- 82). Oxford: Blackwell.
- Prévost, P. and White, L. (2000). Missing surface inflection or impairment in second language acquisition? Evidence from tense and agreement. *Second Language Research* 16: 103-33.
- Radford, A. (2004). *Minimalist syntax: Exploring the structure of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rohrbacher, B. W. (1994). *The Germanic VO languages and the full paradigm*. Ph.D. dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Schwartz, B. D. and R. A. Sprouse. (1994). Word order and nominative case in nonnative language acquisition: A longitudinal study of (L1 Turkish) German interlanguage. In T. Hoekstra and B. D. Schwartz (eds.), *Language acquisition studies in generative grammar*. (pp. 317-368). Amsterdam: John Benjamins.
- Schwartz, B. D. and R. A. Sprouse. (1996). L2 cognitive status and the Full Transfer/Full Access Model. *Second Language Research* 12: 40-72.
- Towell, R. and R. Hawkins (1994). *Approaches to second language acquisition*. Multilingual Matters.
- Vainikka, A. and M. Young-Scholten. (1994). Direct access to X' theory: Evidence from Korean and Turkish adults learning German. In T. Hoekstra and B. D. Schwartz (eds.), *Language acquisition studies in generative grammar*. (pp. 265-316). Amsterdam: John Benjamins.
- Vainikka, A. and M. Young-Scholten. (1996). Gradual development of L2 phrase structure. *Second Language Research* 12: 7-39.
- Wakabayashi, S. (1997). *The acquisition of functional categories by learners of English*. Ph.D. dissertation, University of Cambridge.
- Wakabayashi, S. (2001). The acquisition of non-null subjects in English: A minimalist account. *Second Language Research* 18: 28-71.
- Wakabayashi, S., K. Fukuda, M. Bannai, and S. Asaoka (2004). Sensitivity to irrelevant morphological markings: Event Related Brain Potential findings. *Generative Approaches to Second Language Acquisition (GASLA) 2004*, Indiana University, U.S.A.
- White, L. (1991). Adverb placement in second language acquisition: Some effects of positive and negative evidence in the classroom. *Second Language Research* 7: 133-161.
- 佐々木裕美 (2002).『日本人英語学習者における一致形態素の脱落について』福島工業高等専門学校コミュニケーション情報学科卒業研究報告.
- 中村 捷、金子義明、菊地 朗 (2001).『生成文法の新展開－ミニマリスト・プログラム－』東京：研究社
- 若林茂則 (2002).『3単現の-s は、なぜ難しいのか』日本第二言語習得学会(J-SLA)第二回夏季セミナー、草津セミナーハウス.